

# 動物実験知ってるつもり

講師 中村雅治氏

NPO 法人アニマルライツセンター  
動物実験・畜産部門理事

## はじめに

鳥取共生動物市民連絡協議会にとって動物実験は未着手の分野でした。今回、第五回講演会事業「動物実験知ってるつもり」を開催するに至った経緯は、動物園の猿が発端です。

余剰動物を生む社会構造の改善を主旨として、身近な捨て猫問題から入った私達は守備範囲を広げ、一昨年より県内動物園のサルの繁殖制限に取り組んでいます。市町村が運営する県内施設は三ヶ所。鳥取市の猿は去勢され、倉吉市は既に一部予算を獲得して順次行なう段取りとなりました。今年2月、米子市湊山公園猿が島の繁殖状況を問い合わせると、米子市役所は最初、「税金は使っていません！敷地を提供しているだけです。運営は米子ライオンズクラブと大阪大学がしている。」と答えました。事実はそうじゃないんですね。この電話はあとで何かの間違いで片付けられました。対応を不審に思い調べたところ、昨年5月、米子市が湊山公園猿が島の猿七頭を動物実験用繁殖施設に非公開譲渡した事実が明らかになりました。猿の譲渡先、「日本野生動物研究所」は文部科学省のNBP（ナショナル・バイオリソース・プロジェクト）の非公開登録施設です。

プロジェクトは研究者に実験用動物を安定して供給するのが目的です。湊山公園の猿は繁殖母体として譲渡され、プロジェクトの関係者は「直接、実験に使われる事は絶対はない。」と繰り返しますが、まず、繁殖母体なら転用が許されるのかという問題があります。次に、事実確認を誰がするのでしょうか？日本野生動物研究所は契約上、外部に対し一切の情報開示が出来ない仕組みになっています。それに、施設はすでに二千頭を収容して、それでもまだまだ足りないと言っているのです。千頭単位の猿は破格の規模です。飼育管理はどのように行なわれているのでしょうか？外部からは窺い知ることが出来ません。繁殖年齢を過ぎた猿はどうなるのでしょうか？幸せな老後が約束されているとは思えません。

その先っちょに動物実験がからんでいると、関係者一同、本当に閉鎖的になります。そのおかしな態度は、まるで社会から隔絶した世界の番人よろしくといったところです。それで私達は動物実験について少し勉強することに決めました。

今回、大変お忙しい中、講師としてお越し頂いた中村雅治先生は東京大学工学部で遺伝子工学をご専攻になり、企業研究者として動物実験に従事した経験から反対運動に参画された専門家です。現在、勤務のかたわらNPO法人アニマルライツセンター（ARC）動物実験・畜産部門理事として活動されています。動物実験廃止を目標に掲げて活動する団体は、ARCの他にもアライブ・アヴァネット、J A V A等があります。いずれもホームページを開設していますので覗い

て見て下さい。シンガーの「動物の解放」やハンス・リュース著「罪なきものの虐殺」は世界中の人々に入門書として読みつがれ、県立図書館にも収蔵されています。アニマルライツの思想について以下、簡単にご紹介しておきましょう。

### アニマルライツとは

Animal Rights（動物の権利）の思想は、1975 年、ピーター・シンガー が「動物の解放」によって体系的な考察を著し、人間が動物達に加えるスピーシズム（種差別）の現状を告発しました。本著は苛酷なスピーシズムの現場として動物実験と畜産に各々一章を割いています。哲学と倫理学の教授であるシンガーは、動物の解放を「解放運動」として位置付け、黒人差別や少数民族の抑圧、女性差別と本質的に同じ問題とみなしています。

人間同士の倫理を人と動物の関係に敷衍していくのはやりすぎでしょうか？そうとも思えない事例はたくさんあります。飼主さんに評判の良い動物病院の先生が「動物は人間程には苦痛を感じない。」「動物に感情はない。」などと間違ったことを言うのを聞いた事はありませんか？犬猫と一緒に暮らした経験のある人なら誰でも、動物が苦痛に敏感で感情生活を営むことを疑いません。非科学的な発言の根底には種差別の偏見や固定観念があります。必要な配慮を怠る口実に動物の苦痛や感情の存在を否定してかかるのであれば、種差別は人間同士の差別の構造と変わらないでしょう。

1792 年、メアリ・ウォルストンクラフトの「女性の権利の擁護」が刊行された時、トーマス・テイラー教授は匿名で「動物の権利の擁護」を著しフェミニズムを揶揄しました（第一章「すべての動物は平等である」）。メアリの議論を敷衍すれば女性だけでなく動物にも権利を認めなくてはならない。そういう馬鹿げた結論に導くような議論の筋道が正当であるはずがない、彼はそう言いたかったのです。もし、トーマスがメアリの議論の正当性を認め、文字通り動物の権利を擁護していたら、彼の名は私達にもっと聞きなれた人物として残ったでしょう。

シンガーは序文で「解放運動は、われわれの道德上の視野の拡大を要求する。それまでは自然で不可避的なものと見られていた行為が、正当化しえない偏見の結果であるとみなされるようになる。」と述べ、「われわれの態度と行為の中には特定のグループ（自分自身が所属する）を利するために他のグループを犠牲にする傾向が潜んでいる」と指摘しています。実際、法整備運動や法令遵守チェック活動に参画し、動物の権利擁護を代弁しようとする、「人間様の恣意的自由を動物の上に行使する自由に抵触する」という壁にしょっちゅうぶつかります。しかし、例えば流行りのチワワが飼いたくてレトリバーを処分する飼主の自由を認める必要があるでしょうか？動物虐待で告発された飼主が、罰金を払うだけで動物飼育の権利を剥奪されないのはおかしくないでしょうか？

日本では 5 年前の動物愛護法で漸く動物が「生きもの」とであると認められました。多くの課題を残す不十分な法改正でしたが、社会が動き始めた大きな一歩です。そして今年、動愛法の改正案が近く国会に提出されます。前回同様、5 年後の見直しの付帯条項が付いた改正案では動物取扱業者に更なる法規制をかけていますし、動物実験にも言及しています。歩みは遅いのですが、

無数の人々の小さな行為が大きな流れを生み、動物の権利は昔ほど無視されてはいません。

1821年、リチャード・マーティンが馬の虐待防止法案を提出すると、下院は哄笑でどよめき、議員の一人は「次は犬か」と茶化し、別の一人が「猫もだ!」と叫ぶと爆笑は更にひどくなりました(第5章「人間による支配」)。マーティンは戦術を変え動物の権利を主張せず、動物の所有者の私有財産保護の形式に起草し直し、漸く法案は通過します。二百年後の今日、「動物虐待」は動物に対する人間の犯罪だと人間社会は認めています。この考えを、少なくとも公の席で嘲笑する議員はいまや存在しません。

アニマルライツの市民運動は広がりを見せ、1987年、日本でもアニマルライツセンター(ARC)が設立されました。それでは、皆様とご一緒に中村先生のお話を伺いたいと思います。

2000.5.28

鳥取共生動物市民連絡協議会

仲市素子

## 私の視点

米子市湊山公園の猿が島は高い飼育水準を維持してきたが、繁殖制限を怠り、

地方自治体もあれば強行した所もあるが、米子市は市民感情の反発を恐れ、最初から論争を避けようとした。

批判を受け、現在環境省は野生鳥獣の医学研究利用は原則不可としている。湊山公園の猿舎は、大阪大学、米子ライオンズクラブ、米子市役所の三者会議で運営管理されてきた。公文書には「大阪大学の研究用として米子市に貸与を受けているもの」とある。研究。

除が一万頭を超すようになった。過剰なサルを人為的に、なお繁殖させるのはどうかと思う。私たちは「譲渡廃止、繁殖制限」を基本運営方針として明文化することを要望しているが、もう一歩進んで、動物園の在りかたが問われるべきだろう。

昨年五月文部科学省のナショナル・バイオ・リソース・プロジェクトの登録施設、奄美大島の日本野生動物研究所へ動物実験用の繁殖母胎に七頭を譲渡した。当時、譲渡をめぐり各地で行政市民間のトラブルが続発していたため、この事実公表されなかった。

動物(生体)の有効利用の是非は、法整備が追いつく以前に民意が反映され、「転用廃止」は引き戻せない大きな時代の流れとなり

実現されてきた。青木氏は「法と動物」の中で、地方自治体収容動物の動物実験転用が昭和六十年をピークに加速度的に廃止に向かった現象を「社会の価値観」の大きな変化と指摘した。

七十年前に非狩猟獣に指定されたサルは全国的な飼育の結果、近年は有害駆除

## おぞましい動物実験

イェン

譲渡に明確な違法性は無い。動物の比較法文化の研究である青木人志一橋大学院教授の言うところの「法があいまいにしている、あるいは、そもそも法が存在しない領域での倫理的論争」の結果、中止した

究施設兼展示施設、これに実験用サルを供給する機能が加わった。功利第一主義でサルを無駄なく利用する他目的施設におぞましさを感ずるのは私一人ではない。

以上、動物の平均寿命、習性を考慮した選択がなされなければならぬ。寿命が長く群れを作るサルを、繁殖制限しないで小規模施設で展示すること自体、無理がある。楽しいサルを眺めて何が楽しいか? こちらの気分まで暗くなる。

(鳥取市緑ヶ丘、仲市素子、鳥取共生動物市民連絡協議会主宰)